



Japan Music Education Society News Letter

第49号

No. 49

日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1 会員の窓	
1-1 PECERA に参加して	2
2 海外トピックス	
2-1 ISME Commission on Policy: Culture, Education, and Media	3
2-2 第 30 回 IMSE 世界大会報告 その 1	3
2-3 第 30 回 IMSE 世界大会報告 その 2	4
2-4 第 30 回 IMSE 世界大会報告 その 3	5
2-5 第 30 回 IMSE 世界大会報告 その 4	6
3 新刊紹介	
3-1 『音楽の話をしよう～10 代のための音楽講座～』	6
3-2 『The Wind from the East ～東からの風～』	7
4 報告	
4-1 平成 24 年度第 2 回常任理事会報告	8
4-2 国際交流委員会から報告	11
4-3 編集委員会からの報告	11
5 お知らせ	
5-1 日本音楽教育学会第 43 回大会実行委員会よりお知らせ	12
5-2 プロジェクト研究「音楽教育学における『記録』」	13
6 事務局より	13
編集後記	

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX : 042-381-3562 E-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 * 郵便物は私書箱へ

開局日：月・水・金 開局時間： 9:00~15:00

1 会員の窓

1-1 PECERAに参加して

石川 真佐江（静岡大学）・村上 康子（共立女子大学）

2012年7月20日から22日にかけてシンガポールで行われた、PECERA（Pacific Early Childhood Education Research Association 環太平洋乳幼児教育学会）の第13回大会に参加した。会場となったNational Institute of Educationはシンガポールの西側にあり、日本人である私たちが「シンガポール」と聞いてイメージするウォーターフロントの高層ビル街とは全く異なる、南国の木々と芝生とが緑で彩る非常に閑静で広い大学であった。近代的なビルと高層ホテル、ショッピング街だけではなく、東南アジアらしい空気も感じることができ、シンガポールの魅力的な2つの面を知ることができた。



▲ メイン会場

第13回の国際会議は、基調講演2本、パネルディスカッション2本、ラウンドテーブルディスカッション1本、ワークショップ4本、148本の口頭発表、129本のポスター発表、そして、幼稚園や児童福祉施設等の視察が行われた。ISMEと開催期間が重なっていたにもかかわらず、音楽教育学会でお名前を拝見する先生方のご参加も多かった。

初日の午前中には、現地の幼稚園を視察するツアーに参加した。多民族国家であるシンガポールでは、保育施設にもさまざまな民族の子どもが集まる。私たちが視察に行ったSt. James' Church Kindergartenは、広大な敷地と整備された環境を備え、ヴィゴツキーの教育と発達理論に基づいた教育プログラムを実践している。2歳～3歳のPre-Nursery Classと3歳～5歳のNursery Classがあり、プロジェクト型の活動はレッジョ・エミリアの幼児教育の影響を感じさせた。さまざまな民族の子どもが通うこともあり、幼稚園では英語と同時に中国語をも学ぶということであった。ただ、視察は園内の環境と施設、子どもたちのこれまでの作品などが中心であり、いわゆる公開保育をイメージしていた私たちにとって、子どもがどのように遊んでいるのか、また保育者がどのように子どもとかかわっているのかという保育の核心部分を見ることができなかつたことは残念である。

さて、大会で行われた数多くの発表の中、音楽に関連するものはやはり少ない。乳幼児教育という領域の幅広さを感じさせられた。一方で、同じセッションで発表した台湾からの発表者に「あなたたちの研究は、この学会のコンセプトにフィットしているわね」とコメントを頂いた。さらに「乳幼児の音楽活動に於いてはとても重要な内容よね」とも。「乳幼児期の音楽」という研究分野は、前提となる保育における音楽についての理解や、各国の保育における文化的な差異も大きく、果たして私たちの研究内容が理解してもらえるのかどうか不安があつたが、今回発表した幼児期における音を聴く活動についての分析観点について、他国の研究者にも共感してもらえたのは嬉しいことであった。また、他の研究者の発表を聞くことで、他国の乳幼児教育における音楽に関する実践や研究の動向など、生の情報を得ることができたことも貴重な経験となつた。

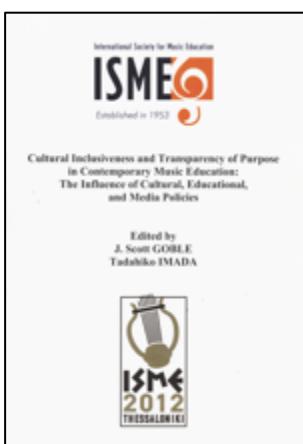


今回、この会議への参加は、自分たちのデータの分析方法や研究手法などを見直すよい機会ともなつた。今後も実践と研究を蓄積しながら、それを国内だけではなく海外へも積極的に発信し、そして同時に海外の研究動向や研究知識からも学んで、さらに経験をかさねていきたいと考えている。

▲ 発表会場

2 海外トピックス

2-1 ISME Commission on Policy: Culture, Education, and Media



今田 匡彦（弘前大学）

テッサロニキで開催された第30回世界大会に先立ち、上記のコミッショナ・セミナーは7月11日から13日の3日間、アテネにて開催された。“Cultural Inclusiveness and Transparency of Purpose in Contemporary Music Education: The Influence of Cultural, Educational, and Media Policies.”というテーマのもと、香港、台湾、中国、韓国、日本、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アメリカから計21本の研究論文が発表された。参加者全員が全員の発表を聞き、質疑応答を含め一人40分の発表時間が確保されるのはコミッショナ・セミナーならではの利点である。そのなかで特に印象に残ったのは、非英語圏から参加した若手の大学院生たちの存在である。特に韓国からたった一人でエントリーしたSang Ah SEOK(Seoul National University)は、修士論文を間もなく書き終える段階での発表であった。彼女の国際学会への参加意欲は称賛に値する。また、中国からは博士課程、修士課程合わせて10人の大学院生が参加し、果敢に質疑を行っていたことも明記しておこう。

さて、私はこのセミナーをもって6年間のコミッショナー及び2年間のコーチェアの任期を終えることになる。コミッショナ・チエアは名誉職ではないので、セミナーのテーマの決定に始まり、ホスト大学の選定、ISMEニュースレターへの記事執筆、事務局への定期的なレポート提出、予算の設定、論文の査読とProceedingsの編集、会議会場及び宿泊施設の手配など、すべてをこなさなければならない。今回、日本からの参加が私だけだったこともあり、次期コミッショナーは全員が英語圏から選出される、という結果となった。非英語圏の人間にとつて英語で学会を運営するのは容易なことではない。しかし、中国や韓国からの大学院生たちの参加姿勢を考えると、今後日本からのより積極的な参加が期待される。

2-2 第30回ISME世界大会報告 その1

小畠 千尋（宮城教育大学）

2012年7月15日から20日まで、ギリシャ第二の都市、テッサロニキで開催されたISME第30回世界大会に参加しました。現在、日本とギリシャ間で直行便の飛行機はありません。しかも、乗り継いでも到着が深夜になってしまうため、安全面から経由地で1泊せざるを得なく、2日かけてテッサロニキまで移動しました。移動だけでも一苦労でしたが、それでも、参加できて本当によかったですと感じられる実り多い数日間でした。

テッサロニキには、世界遺産ともなっているビザンティン時代に建てられた教会や紀元前のものと思われる遺跡が町中 있습니다。その歴史ある町のテルマイコス湾に面したテッサロニキホールが会場でした。



▲ ポスター発表会場の様子

私が今回特に印象に残っているのは、まずポスター発表の時間がとても充実していたということです。ホール3階のロビーが会場として用いられたのですが、2階と3階の間が吹き抜けで、フロアも広く、毎日多くの参加者がポスター発表を見聞きしに来っていました。口頭発表、コンサートの合間などにもポスター発表を見に行こうかなと思える雰囲気となっていたのは、ほぼ毎日、同じ時間帯（昼前、昼後、夕方）でプログラムが組まれていたことも影響していると思います。私自身もポスター発表

をさせていただきましたが、さまざまな国の参加者の方の反応を直接聞くことができ、大変勉強になりました。

また期間中の音楽パフォーマンスも、非常に興味深いプログラムがたくさんありました。会場内のホールはもちろんですが、ロビー、会場外の野外ステージ、テルマイコス湾を背景にしてのガラス張りのスペースなど、会場の至るところで、お昼過ぎから、夜は23時台まで、ギリシャの団体だけでなくさまざまな地域の音楽を楽しめました。このコンサートについては、演奏中の写真撮影等が自由であり、資料収集の場としても貴重だと感じました。



▲ ギリシャの民俗ダンス

2-3 第30回ISME世界大会報告 その2

今 由佳里（鹿児島大学）

7月15日～20日にギリシャのテッサロニキでISME世界大会が開催された。財政危機に揺れるギリシャでの開催であったため、治安に多少の不安を持っての参加であったが、そのことは全くの杞憂に終わることとなった。会場はテッサロニキコンサートホール、海のすぐ側という立地のため、エーゲ海に浮かんでいる錯覚をおこさせるような場所での開催であった。

今回私は、「身体表現を伴った小学校での音楽表現学習」というタイトルでポスター発表を行った。日本の小学校における教育実践をメインに取りあげ発表したが、拙い英語での説明にも関わらず耳を傾けて質問をしてくださったり、今後の研究に関するアドバイスをいただけたりと、海外での発表の醍醐味を味わえることができた。

ISMEでは、研究発表と並行して各国から数多くのワークショップが提供されている。このワークショップではオルフやリトミックなどの音楽教育メソッドも取り上げられているが、今回私は諸外国の音楽を学べる格好の機会と思い、開催国ギリシャの音楽とダンスのワークショップを中心に参加した。ワークショップでは、8分の5、7、9という変拍子に手拍子や言葉を入れていく活動から入り、グループでアンサンブルを考えたり、9拍子のギリシャ音楽にのってダンスのステップを踏んだり、各国からの参加者と共にわきあいあいとした雰囲気の中で楽しくギリシャリズムを学ぶことができた。

またISMEでは、連日多くのコンサートが企画されている。こちらの方も各国からの参加があり、バラエティ豊かな音楽を楽しむことができるISMEの楽しみのひとつである。3日目であつただろうか、会場の移動をしている時に私は、ギリシャの子どもたちによるオペラのリハ

ーサルの場面に遭遇した。リハーサルとはいえ、子どもたちは本番さながらに演じており、その演奏に多くの人が足を止め見入っていた。リハーサルが終えた後もその場に留まっていると、演奏に参加していた一人の女の子が近づいてきて、片言の日本語で話しかけてくれた。日本語を勉強しているという彼女は、このオペラは、東洋をテーマにしているということを伝えたかったようだ。そんな私たちの様子を見ていた他の子どもたちも、異国の言葉を話す自分の仲間に驚き、目をキラキラ輝かせながら笑顔で私たちの周りを取り囲んで様子をうかがっていた。欧洲の子どもたちは、



▲ オペラ stonesoupに参加している子ども達



▲ ポスター発表

幼いころより自分の意思をはっきりと相手に示すため、日本より少し大人びた印象を持っていたのだが、会場で出会うたびに、気づいてもらおうと一生懸命に手を振ってくれる彼らの無邪気な様子に、微笑しさを感じた。

ISMEへの参加者は今年も2000人を超えており、町を挙げてのお祭りのような活気が漲っていた。期間中は、配られたISMEバッグを持っている人々と町中いたるところで出会い、あなたもISME?というように知らない人同士でも話すきっかけがつくられた。様々な国の音楽教育関係者と考えを共有・交換し、自分の研究を見直す機会ともなり、充実した一週間であった。

2-4 第30回ISME世界大会報告 その3

駒 久美子（和洋女子大学）

2012年7月15日から20日まで、ギリシャ・テッサロニキにて開催されたISME大会は、私にとって4度目の大会参加である。初めてISMEに参加したのは、2000年のカナダ・エドモントン大会であったが、発表者としての参加は2008年のイタリア・ボローニャ大会より3度目である。つたない英語ながらも、発表を重ねるたびに各国の参加者とのコミュニケーションが多くなっていることに、遅々とした歩みではあるが、今後も国際学会で発表し続けられるような研究者でありたいと思っている。

今回、私は個人のポスター発表と、共同のワークショップ発表を行った。ポスター発表では“Exploring Children’s Creative Music Activities at a Kindergarten: Focusing on the Percussion Instruments of Japan, the Philippines, and West Africa”というタイトルで、3ヶ国の打楽器を用いた幼児の創造的な音楽活動の展開を比較分析した。発表会場では、ポスターの横にパソコンを準備して、実際に活動の様子を映像で流しながら適宜説明を加えたり、ポスターの縮小版のハンドアウトを手渡したりして、一人でも多くの参加者に私の研究内容をより理解して頂けるよう努めた。私の隣で発表していたブラジルの研究者とともに、お互いの発表について意見を述べあったり、さらに隣の発表者のポスター発表を聞きにいったり、これまで面識のなかった日本人研究者の方とお互いの研究について意見を述べあったり、60分の発表時間があっという間に過ぎ、発表を楽しむことができた。あとで知ったことだが、この日のテッサロニキは、気温40度!汗だくの発表であったが、実りある発表となつた。



▲ ポスター発表

また、共同のワークショップ発表では、日本女子大学の博士課程院生である味府美香を中心、同じく院生の古山律子さん、日本女子大学教授、坪能由紀子先生とともに、日本女子大学、博士課程院生の長尾智絵さん、さらに修士課程院生の佐藤友美さんもサポートに加わった6人での発表となつた。ワークショップでは“Exploring the Creative Activities based on the Repetition: From the non-Western Music to Reich and From Reich to the World Music”というタイトルのもと、45分間のワークショップを行つた。



◀ ワークショップ

non-Western Music のひとつとして、アフリカのアグバザに着目し、それが Reich に与えたであろう影響を Clapping Music に見出して進められたこのワークショップ会場に、詰めかけた参加者は恐らく 70 人を超えていたと思う。リーダーを務めた味府さんは、初めての英語でのワークショップ、始まる直前まで緊張におしつぶされそうになりながらも、あっという間に参加者を惹きつけ、その結果ほとんどの参加者がワークショップに参加し、ワークショップ最後まで会場を後にすることもなく、温かい拍手を送ってくださったことは私たちにとって何よりの喜びであった。もちろん課題も山積であるが、世界へ新たな一步を踏み出した瞬間であった。

2-5 第30回ISME世界大会報告 その4

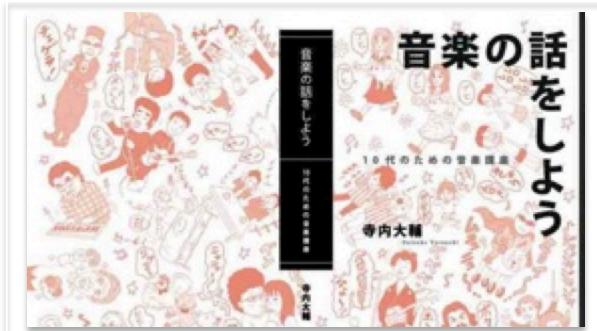
水戸 博道（明治学院大学）

第30回 ISME 世界大会（ギリシャ：テッサロニキ）は、盛況裏に幕を閉じた。今回の大会で一つ残念だったのは、年々減っている日本からの参加者が、さらに減ったことである。今回は、大きな経済不安をかかえるギリシャでの開催であったことや、大会が学校の授業期間中にかぶってしまったことがその大きな要因であろう。しかし、中国からは大学院生を含む多くの研究者や教員が参加し、英語はつたないながらも、積極的に発表や質疑を行っていた。どうしても日本の地盤沈下が目についたのである。次回大会は、ブラジル、ポルト・アレグレ。日本からの参加はさらに条件が悪くなるが、若手を中心とした多くの参加を期待したい。

3 新刊紹介

3-1 『音楽の話をしよう～10代のための音楽講座～』

寺内 大輔（広島大学）



ふくろう出版、A5版
総数 182 頁
定価 1,890 円
(本体 1,800 円+税)
ISBN-13: 978-4861864827

若い読者（小学生～大学生）に向けて書いた、音楽に関する「雑談集」です。たかが雑談、ではありますが、私自身、音楽と向き合う上で、友人や音楽家との様々な雑談から多くのことを学んできました。

著者である「ぼく」は、若い作曲家です。本書の冒頭には、次のように書かれています。

作曲家の仕事は、曲を作ることだけど、ただそれだけではなく、「音楽と人との付き合い方」を考えることも大切だ。曲を作るとか、曲を演奏するとか、そういう音楽家の様々な仕事は、音楽と人との関係の上に成立しているからだ。（中略）この本は、「音楽講座」という題名が付いているけれど、ぼくが君に何かを「教える」本じゃない。音楽のことを君とぼくと一緒に考える本だ。だから、この本を読むときは、君自身の考えを大切にして欲しい。ぼくの考えに賛成する時もあるかもしれないが、「いや、それはちょっと違うんじゃないかな」と思う時もあるに違いない。そんな風にいろいろ考えていくことで、君は、君自身の「音楽との付き合い方」を見つけていくだろう。君にとっての「音楽」が、これまでとはガラリと変わってしまうこともあるかもしれない。でも、きっとそれは、これまでよりも興味深いものになるはずだ。

取り上げられているテーマは、「音を聴く」「音の表現」「聴き方」「誰かに聴かれることを意図しない音楽」「場と音楽」「歌う・楽器を弾く・作曲をする」「脳内音楽」「BGM」「音楽の聴かれ方・音楽の聴かせ方」「流行」「機械と人間」「音楽ジャンル」「感動する」「音楽の役割」「価値観」の15項目です。門倉フリッツ貴浩さんの楽しい漫画をまじえ、平易な言葉で語るよう心がけました。

3-2 『The Wind from the East ~東からの風~』 (東アジアの若手音楽家から創造的音楽づくりへの誘い)

坪能由紀子 (編)



The Wind from the East: Proposals for Creative Music Activities
by Young Musicians from East Asian Countries
Journal of Creative Music Activity for Children Vol. 1
(日本女子大学 Institute of Creative Music Activity for Children)
全83頁 2012年刊行 ISSN 2187-2023

「せーのっ！」粋なかけ声とともに、一瞬にして会場全体に即興的リズムの輪が広がった。世界各地から集まった参加者達は共に音楽を創造する仲間となり、その時（トキ）と空間を共有した。音楽づくりはエキサイティングで楽しい！2012年夏、ギリシャで開催された第30回ISME世界大会、ワークショップ会場での一コマである。その会場¹で参加者達が注目したのが、英語で書かれた本書であった。東アジアの国々から世界の音楽教育者仲間に向けて発信された『子どものための創造的な音楽活動アイデアと実践例』(英語版)である。『創造的な音楽活動ジャーナル (Journal of Creative Music Activity for Children)』の第一弾として発行された。これまでジョン・ケージやスティーブ・ライヒをはじめとする海外の音楽家達から少なからず影響をうけながら、東アジアの音楽や文化の中で試行錯誤されてきた創造的な音楽活動。今度は東アジアの音楽家の視点から世界に発信しようとする。長年にわたりワークショップ、コンサート、講習などをとおして、子どもの音楽づくりの普及のために幅広い活動を行っている坪能由紀子氏を中心とする“Institute of Creative Music Activity for Children”ならではの企画と言えよう。

(1) Musical/Structure (2) Musical/Motifs (3) Musical/Scales
(4) New Starting Points (5) Globalization and Localization in Music という5つパートからなる本書には、16名の若手音楽家・教育者執筆による、東アジアの国々の音楽や楽器を使った音楽づくりのアイデアが紹介されている。『武満の音楽』『こもりうた』から『J-ポップ』まで非常にバラエティに富んでいて面白い。多様な音楽の中に潜在する音楽的『共通性』や『構造性』に着目した内容と構成になっている。自由に参加できる音楽あそびの中で、世の中の音楽がどうやって生み出されているのかを知ることの喜びを教えてくれるレッスンアイデア集である。



世界の読者を意識した細やかな配慮がなされていることも本書の特徴の一つであろう。それぞれの文化的価値を無視することなく、むしろ尊重しながらも、どこの国の音楽授業でも違和感なく取り組めるよう楽器選びのアイデアや工夫、授業の進め方のコツ等が提案されている。英語が第一言語でない国の方々にも読みやすいように、分かりやすい英文で書かれ、小さなお子さんから大人まで十分に楽しめるような内容になっている。世界各地の音楽づくり活動の中に、東洋の音楽とそこから生まれた音楽づくりのアイデアが広がって行く時代がきたと感じさせる本書は、まさしく、東からの風(『The Wind from the East』)なのである。

<執筆者>

Kumiko Koma (Wayo Women's University), Wei Qu (Teacher in the Preschool Development and Edu-

¹ ワークショップ ‘Songs and Singing Games from Asia’:味符美香（日本女子大学）駒久美子（和洋女子大学）古山律子（日本女子大学）坪能由起子（日本女子大学）

cation College of China Women's University), Wasun Pak (Tokyo University of the Arts), Minkyoung Bae (Hokkaido University of Education), Wakako Nagaoka (Japan Women's University), Mariko Kai (Tokyo University of the Arts), Rituko Furuyama (Japan Women's University), Nanae Koizuka (Tokyo University of the Arts), Shiori Hagiwara (Tokyo University of the Arts), Tadahiko Imada (Hirosaki University), Mika Ajifu (Japan Women's University), Mari Obinata (Tokyo University of the Arts), Kazuhiko Kinoshita (Japan Women's University), Toshiya Suzuki (Recorder Player)

執筆者：近藤真子（オークランド大学）

4 報告

4-1 平成 24 年度第 2 回常任理事会報告

日 時：平成 24 年 7 月 29 日（日）14:00～16:40

場 所：聖心女子大学 音楽室

出席者：加藤、有本、今川、伊野、今田、小川、奥、北山、佐野、島崎、寺田（記録）、水戸

【会務報告】

加藤会長の挨拶に続き、今川事務局長から第 1 回理事会以降の会務報告がおこなわれた。

〈平成 24 年 5 月 13 日以降〉

5 月 13 日 平成 24 年度第 1 回常任理事会・理事会

6 月 15 日 第 43 回大会発表申込締切

7 月 1 日 『音楽教育学』第 42 卷第 1 号、ニュースレター No.48 発送

【審議事項】

1 日本音楽教育学会第 43 回大会（東京大会）について

(1) プログラム

伊野常任理事よりプログラム編成について説明があり、承認された。また、プログラム発行に向けて校正中であること、研究発表分科会司会者の補欠については常任理事で対応することが説明され、承認された。

(2) 大会参加費

今川事務局長より、参加費についての確認（第 1 回常任理事会で承認済み）と、懇親会費 5,000 円とすることを大会実行委員会から提案されていると報告された。

(3) 大会実行委員会企画など

今川事務局長より、プログラム目次に掲載する大会実行委員会企画について説明された。また、①一部の企画への参加申込み方法の検討、②各ワークショップの内容について説明がなされた。円滑な運営に向けて大会実行委員会と検討し調整していくことが提案され、承認された。

(4) 常任理事会企画

今川事務局長及び寺田常任理事より、常任委員会企画のプロジェクト研究 2 件について概要の説明があり、承認された。

プロジェクト研究 I 「音楽教育研究におけるルールとは(2)」は、第 2 次ワーキンググループによるアンケート調査の分析に基づき、著作権について学びを深める。プロジェクト研究 II 「音楽教育学における「記録」」は、「記録」という視点から音楽教育の事象を考えようとする企画で、次年度はプロジェクト発表者を公募する予定である。

(5) 大会実行委員会組織

今川事務局長より、実行委員会構成員（5 月理事会で報告済み）の確認がなされた。

(6) 賛助会員一覧

今川事務局長から賛助会費が納入された企業一覧が報告され承認された。なお、第 43 回大会プログラムへの広告協賛企業及び出店ブース協賛企業（大会プログラムに掲載）についても報告された。

(7) その他

今川事務局長から、従来から研究発表者へ送付していた研究者倫理意識の自覚を促す文書（「研究発表にあたってのお願い」）を今回も発送することが提案された。学会名で文書を送

付すること、チェックリストを見やすく改善することが意見として出され、その方向で文書作成し送付することが承認された。

2 平成 24 年度補正予算案

島崎常任理事から、平成 24 年度補正予算案（常任理事会メール会議で既に承認済み）について、7月 20 日現在の会員数の実態に即した予算案であることが説明され、承認された。

3 平成 25 年度補正予算案

島崎常任理事から、平成 25 年度補正予算案（常任理事会メール会議で既に承認済み）について、7月 20 日現在の会員数の実態に即した予算案であることが説明され、承認された。

4 来年度ゼミナールについて

来年度ゼミナールの内容をどのような方針で考えていくかという、佐野常任理事からの検討依頼を受け、意見交換された。今田常任理事から、ISME 等の国際会議での日本人の状況を考え、海外での研究発表の活性化に向けて国際交流委員会との共同企画を探ることが提案された。あわせて神田ゼミナールとの関連などが議論された。加藤会長から、学会として「アピールできること」「気になること」をゼミナールの柱に加えて企画を検討する方向が提案され、承認された。来年度ゼミナールの日程を、平成 25 年 8 月 24~25 日（予定）とし、国際交流委員会の担当する柱を、ひとつ立てることになった。

5 新入会員および退会者について

今川事務局長から、平成 24 年 5 月 13 日以降の新入会員 29 名、学生会員 1 名、申し出退会者 2 名、自然退会者 29 名が報告され、承認された。この他にも入会手続き中が数名いる。新入会員所属先の表記については、現在は本人の入力データをそのまま反映しているが、学会各種文書での表記を統一するかについての意見が交換され、本人の表記の使用をしばらく継続することになった。また、特別会員（海外在住の外国人）、名誉会員、賛助会員の資格等について意見が交換された。会則・細則等の見直しの必要があり、総務担当常任理事で検討することになった。

【報告事項】

1 各委員会等報告

(1) 編集委員会報告

伊野常任理事より、以下の 4 件が報告された。①『音楽教育学』第 42 卷第 1 号で、2 年間継続した「多文化生社会に果たす音楽教育の役割」が完結した。執筆者に恵まれ、充実した誌面をつくることができた。②『音楽教育実践ジャーナル』第 10 卷第 1 号は編集作業が進み、8 月 20 日頃発行予定である。③今年度は編集担当者のお陰で編集作業効率が非常に改善されている。④学会誌投稿数の向上に働きかけていきたい。

佐野常任理事から、『音楽教育実践ジャーナル』座談会参加者への交通費、記録テープおこしの作業料について発行費から支出したいとの提案があり、これに伴って、今後ジャーナル発行費からの編集経費支出にあたって編集委員会の主体性を尊重する方針が確認された。

(2) 倫理綱領作成委員会

8 月 16 日に第 1 回委員会を開催することが、今川事務局長から報告された。

(3) 音楽教育支援ポータルサイト

東北地区的会員に対して、要望、現状等の調査を実施するため、通信費を支出することが、今川事務局長から報告された。

(4) 音楽文献目録委員会

国際版作業が完了していること、IMS(国際音楽学会)ローマ大会での RILM 国際会議に樋口隆一委員長が出席したこと、委員会への寄付を募集していること、40 号までの CD-R 作成を検討中であることが、今川事務局長から報告された。

2 日韓音楽教育ワークショップの進捗状況について

8月25～26日で開催であるが、韓国側の来日予定が漸く確定しつつあること、参加者増加への協力をお願いしたいこと、準備段階での諸連絡の困難さ、開催に関しての予算上の課題等が、水戸常任理事から報告された。

3 第44回大会について

平成25年10月12～13日に弘前大学で開催すること、弘前大学教育学部および教育学部附属国際音楽センターとの共催になること、大会実行委員会企画は、海外から研究者を招聘すること、弘前市コンベンションビューローの助成を受けること等が、今田常任理事から報告された。

4 その他

大会プログラム他の発送（8月）のみ外注予定であることが、今川事務局長から報告され、外注先の個人情報保護体制についても報告された。

今後の予定

8月2日	平成24年度第2回編集委員会
8月25・26日	日韓音楽教育ワークショップ
8月27日	音楽教育実践ジャーナル Vol.10. No.1 発送 ニュースレター第49号発行、第43回大会プログラム発送
10月6日	第3回編集委員会、第3回常任理事会、第2回理事会
10月7～8日	第43回全国大会 会場：東京音楽大学
12月下旬	音楽教育学 第42巻第2号 発行、ニュースレター 第50号 発行
2月中旬	平成24年度第4回編集委員会、平成24年度第4回常任理事会
3月末日頃	音楽教育実践ジャーナル Vol.10. No.2 発行 ニュースレター第51号発行、平成24年度会計決算

新入会員（平成24年5月13日以降）：29名

【7月20日現在 正会員数：1487名
学生会員数：2名】

4-2 国際交流委員会から報告

国際交流委員会委員長 今田 匡彦

“ARTS EDUCATION AND THE COMMUNITY”をテーマとして、第9回アジア太平洋音楽教育シンポジウム（APSMER）が、2013年7月17日～19日、シンガポールにて開催されます。発表申し込みのためのアブストラクトの提出期限は、今年の10月15日となります。日本語で思考し、言語化された研究が、日本国内で受容される、という循環は決して悪いことではありません。同時に研究が研究である以上、たとえば英語という別言語により相対化し、国外に発信する、という循環もとても必要なことです。音楽教育のみならず多くの国際学会の言語は英語に統一されています。英語圏の研究者たちが必然的にヘジエモニーを握ることにはなるのですが、非英語圏の複雑性が英語という言語に反映され、異なるアクセントで発表される、というのも国際シンポジウムの重要な点のひとつです。故に、日本から多くの研究発表を期待致します。

詳細は以下の website にて： <http://www.arts2013.sg>

4-3 編集委員会からの報告

編集委員会委員長 尾見 敦子

2012 年度第 2 回編集委員会は、2012 年 8 月 2 日(木)に昭和女子大学で開催されました。委員会の報告、協議内容は以下の通りです。

1. 『音楽教育実践ジャーナル』について

ジャーナル vol.10 no. 1 は、まもなく校了を迎え、8月末には発行となる。来年 3 月末に発行予定の、次号 vol.10 no. 2 (特集テーマ「音楽教育におけるアウトリーチを考える」) の依頼原稿の構成は決定し、あとは 9 月 15 日締切の特集投稿、及び自由投稿を待つのみとなっている。さらに、次々号 vol.11 no. 1 (来年 8 月末に発行予定) の特集テーマは、ホームページとニュースレター今号に同封の「特集・原稿募集」のお知らせによって、会員にお知らせする。こちらも特集投稿、及び自由投稿をお待ちしたい。

2. 『音楽教育学』について

『音楽教育学』(第 42 卷 第 1 号) が 6 月末に発行された。次号(12 月末に発行予定) は大会特集号である。書評の原稿は依頼済みである。

3. 投稿原稿の採否について

『音楽教育学』への投稿原稿については、協議の結果、修正を条件としていた「研究論文」1 本がさらなる修正を条件として掲載可となった。新規投稿の「研究論文」1 本が「修正の上、再査読」となった。

4. 「書評」の公募システムについて

『音楽教育学』では、本学会会員の研究活動に貢献できる学会誌をめざして、「研究動向」や、「書評」など、誌面の充実を図ってきた。「書評」に関しては、他学会の方法に学び、今年度より学会ホームページに「書評公募」のページを設けることになった。会員から広く、本学会誌掲載の書評対象候補を募りたい。また、そこから多くの書評の投稿を期待したい。

5. 「例会報告」について

『音楽教育学』では各地区の例会報告を掲載している。最新号(第 42 卷 第 1 号)の編集に当たり、書式の統一を含む、例会報告の形式の改良を一步進めた。例会報告ではまず、概要が簡潔に記される。研究発表は、プログラムと司会者に統いて、発表内容と質疑応答の様子が報告される。ワークショップなどは、その内容とともに、会員同士が交流する様子など、臨場感のある自由な記述で描かれる。地区担当理事と執筆くださった会員には、編集委員会の意図に応えてくださったことに心から感謝申し上げたい。

次に、会員からの質問への回答、編集の過程で気づいた点をいくつかお伝えします。

まず、査読開始の時期についての質問について、この場であらためてお答えします。編集委員会では事務局に投稿があると、まず、事務局で分量と書式が投稿規定にかなっているかを確認し、投稿者宛に「投稿原稿受理通知」のはがきが送付されます。受理した原稿については、直ちに査読に入ります。査読結果の審議は編集委員会で行われます。そのため、委員会の開催日の関係で学会誌への掲載・不掲載の通知を含めたお知らせには時間がかかるご理解ください。

前号でもお伝えしましたが、重ねてお知らせします。『音楽教育学』の投稿規定が改訂され(平成 23 年 12 月)，投稿の種類に「論考」が加わりました。「研究論文」と「研究報告」とは別種のものとして明確に区別され、8 ページ以内で、要旨は不要です。「学術研究論文としての体裁はとらないものの、学会誌にふさわしい内容の音楽教育批評・評論・論述などをさ

す」と規定されています。新しい規定の改正から半年たちました。会員の皆様からの投稿をお待ちしています。

それから、投稿者が選択した投稿の種別を、修正原稿で変更することはできません（その際は新規投稿となります）。査読は一貫して投稿者の選択した投稿の種別に沿って行われます。

また、投稿時は原稿を後注で作成してください（印刷時に脚注となります）。また、注も文献も、本文と同じサイズです（分量を算出するためです）。ホームページ上の「投稿の手引き」をご参照いただき、不明な点は、事務局内、編集委員会事務局にお問い合わせください。

最後に、10月7日（日）、8日（月・祝）の大会の研究発表は、90件を超えていました。口頭発表をもとに、『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』に多くの投稿がなされることを、編集委員会として大いに期待しております。

5 お知らせ

5-1 日本音楽教育学会第43回大会実行委員会よりお知らせ

① アクセスについて

東京音楽大学の最寄駅は以下のとおりです。

- JR 「池袋駅」東口または「目白駅」より徒歩約15分
- 私鉄 西武池袋線・東武東上線「池袋駅」より徒歩約15分
- 地下鉄 丸ノ内線・有楽町線「池袋駅」より徒歩約15分
- 副都心線「雑司ヶ谷駅」1番出口より徒歩約5分
- 都電荒川線「鬼子母神前」より徒歩約5分

※各駅から東京音楽大学までの詳しい道順は、9月以降に大会HPでもお知らせいたします。

② 宿泊について

- 宿泊施設は池袋駅周辺のほか、東池袋駅、目白駅周辺のホテルのご利用が便利です。
《ホテルの例》池袋駅周辺：ホテルメトロポリタン（西口）、ホテルザ・ビー池袋（東口），
東池袋周辺：サンシャインシティプリンスホテル、目白駅周辺：ホテルメッツ目白 等
- 池袋駅は西口側（山手線の外側）にホテルが多くありますが、西口から本学がある東口に横断するのは時間がかかりますのでご注意ください（ホテルメトロポリタンのみ、
すぐに東口に出られ、徒歩でもタクシーでも本学に近くなります）。

③ 食事について

- 「池袋駅」と「目白駅」には、駅周辺や大学に向かう道の途中にコンビニがあります。
「雑司ヶ谷駅」は大学に向かう道の途中にコンビニや食事をするところはありません。
- 大学から徒歩圏内（7～8分）にはコンビニやファーストフード店があります。「池袋駅」周辺には、デパートや飲食店が多数ありますが、休日のため混雑が予想されます。
なお、大学構内の小さな売店と食堂が営業しております。（営業時間は売店が
8:30～17:00、食堂が11:00～14:00です。）

④ 実行委員会企画について

- ガムランワークショップ（8日午後）のみ定員制（30名×2回）となっております。8日の受付開始時よりA館2階の受付にて先着順で整理券を配布いたします。参加をご希望される方は整理券をお受け取りくださいよう、お願い申し上げます。
- ピアノ公開レッスン（8日午前）で使用する楽譜に関する情報等、各企画に関する情報は大会HPにて随時更新していきます。最新の情報はHPをご覧下さい。

<http://www.tokyo-onrai-musiceducation.jp/43ongakukyoikugakai/index.html>

⑤ その他

8日（月）は祝日ですが、東京音大では授業が行われております。ご理解とご配慮のほど、よろしくお願ひいたします。

5-2 プロジェクト研究「音楽教育学における『記録』」

寺田 貴雄（北海道教育大学）

今年度から新規のプロジェクト研究がスタートしました。「音楽教育学における『記録』」という研究テーマで、様々な音楽教育場面における「記録」の意味や役割、「記録」と学習者・教育者・研究者との関係等を照射し、音楽教育研究の諸相を浮き彫りにしようとするプロジェクトです。

ここで言う「記録」とは、音や音楽のあり様を記したもの（例えば楽譜や楽曲解説文やサウンドマップ）、教育活動を記したもの（例えば学習指導案や実践記録や映像・音声記録）、実験や統計によって生成されたデータ（例えば数量化された図表）などを指しており、様々な音楽教育実践および音楽教育研究の場において〈記されたもの〉を総称しています。

私たちが日常深く関わっている音楽教育研究の場を、「記録」というフィルターを通して見つめると、いつもと異なる景色が見えてくるかも知れません。

今年度、第43回大会では、近藤譲氏（作曲家、お茶の水女子大学）、笹野恵理子氏（立命館大学）、石出和也氏（弘前大学）の3名のパネリストに、「記録」を通して音楽実践や音楽教育実践、音楽教育研究を考えた事例を提示して頂きます。ディスカッションを通して見えてきた観点を基にして、来年度の大会（弘前大学）ではパネリストを公募します。音楽教育学における「記録」の諸相に研究的関心をお持ちの方は、ぜひご参加をお待ちしています。

6 事務局より

■ 日本音楽教育学会第43回大会（東京大会）の参加申し込みについて

1. 同封のハガキ「日本音楽教育学会第43回大会出欠回答」に必要事項をご記入の上、
9月21日（金）必着でご投函ください。なお、大会、総会に欠席される方は、必ず委任状に必要事項をご記入の上お送りくださいますようお願いいたします。
2. 同封の郵便振替「払込取扱票」に必要事項をご記入の上、10月1日（月）までにお振込ください。振込による大会参加費は以下の通りです。大会当日に現金で支払われる場合は（ ）内の金額となります。

正会員参加費 : 4,000円（当日払いの場合 4,500円）

学生会員(学部生に限る) : 2,000円（当日払いの場合 2,500円）

懇親会費 : 5,000円

※ 期日を過ぎてお振込されると、当日受付で振込の確認ができない場合がございます。
10月1日の振込み期日をお守りくださいますようお願いいたします。

※ 会員以外の方（臨時会員）は、当日受付にて参加申し込みをお願いいたします。参加費は両日参加が5,000円（学部生3,000円）、1日のみの参加が3,000円（学部生2,000円）です。

大会の最新情報は大会専用ホームページに掲載しております。

☞ <http://www.tokyo-on dai-musiceducation.jp/43ongakukyoikugakai/index.html>

◇お詫びと訂正◇

ニュースレター第48号の「1-1 第43回大会について」の中でお伝えした学生会員の参加費に誤りがございました。正しくは、上掲しましたように「事前振込の場合 2,000円、当日払いの場合 2,500円」です。

■ 学会誌バックナンバー販売について

学会誌『音楽教育学』創刊号～第41巻 第2号までをセット販売いたします。

価格は全83巻で67,000円（送料別）です。

申し込みは随时メールで、もしくは、第43回東京大会にて承ります。大会当日、事務局受付にてお申し込みください。また、引き続きバックナンバー（『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』）の個別販売もおこなっております。価格等は学会ホームページをご参照ください。

- 申込先：日本音楽教育学会事務局 onkyoiku@remus.dti.ne.jp
記入必要事項：申込者名、連絡先住所、電話番号、送り先住所
※ 購入に際し、請求書、領収書などの書類が必要な場合はお知らせください。
※ 『音楽教育学』バックナンバーには、発行当時の原本のものと、新しくコピー製本したものとがあります（内容は同じです）。

◆事務局開局時間

月・水・金 9:00~15:00

ただし、8月13日～17日 閉局期間となります。

この間のご用件はE-mailにてお願いいたします。

☞onkyoiku@remus.dti.ne.jp



.....【編集後記】.....

ニュースレター49号をお届けします。今回は、海外での報告がたくさん届きました。国際会議でご活躍されている会員の皆様の様子をお伝えしたくて、写真も数多く掲載しました。白黒ではありますが、どうぞお楽しみください。

この夏、25年来お世話になっている地元の音楽教室の合宿に参加してきました。やんちゃ盛りの子どもたちも、いざ楽器を手にすると不思議な集中力の中に吸い込まれていきます。夏休みの間に、このような大小さまざまなイベントが各地で開かれたことでしょう。そんなイベントの様子も「会員の窓」にお知らせいただければと思います。会員の皆様からの声を、広報委員会一同お待ちしております。

大沼覚子・小川容子記